張剣波氏論文審査報告

題目　米中和解と中越関係―中国の対ベトナム政策を中心に

張剣波氏による博士学位申請「米中和解と中越関係―中国の対ベトナム政策を中心に論文は、以下の序論及び6章と結論から構成される。

序論
第一章　中越関係の形成
第二章　中越関係の変質
第三章　米越交渉と米中和解への動き
第四章　キッシンジャー秘密訪中とベトナム問題
第五章　キッシンジャー10月訪中とベトナム問題
第六章　ニクソン訪中とベトナム問題
結論

論文の構成と概要

申請論文は、1949年の中華人民共和国成立以降の中越関係、1971年のキッシンジャー訪中に始まる米中和解と、ベトナム戦争をめぐる中国、ソ連、米国三国間の関係の変化に焦点を合わせ、中越関係が米中和解を媒介にしてどのように変化したかをマルチ・アーカイバルに分析した研究である。各章ごとの内容は以下の通りである。

[序　論]
研究対象、先行研究、仮説設定、構成、研究方法がそれぞれ明らかにされる。1960年代末から70年代初頭にかけての米中和解に対するベトナム政府の公式的見解では、米中和解は中国によるベトナムへの「裏切り」行為であり、その目的は「ベトナム問題を利用して、台湾問題を先に解決する」とされてきた。中国以外の先行研究も、米中和解はベトナムを犠牲にするものであった、とする見解が多い。このような結論を導くには、①米中両国が和解交渉を開始した時点で、中越関係が互いに相手を「犠牲にする・裏切る」と言えるほど密接な関係であったこと、②米中和解の中で中国はそのような関係にあったベトナムを実際に「犠牲にした」、「裏切った」ことを明らかにする、という二つの作業が必要である。これらの問題を明らかにするために、本論文では、（1）中越関係はどのような関係であったのか、（2）米中和解において中国はベトナム問題をどう扱ったか、（3）中国は「ベトナム問題を利用して、台湾問題を先に解決」しようとしたのか、（4）米中和解をめぐる米中交渉の過程で、中国はなぜベトナム問題の解決にこだわったかを研究課題とする。

先行研究は、米中関係、米越関係、中越関係について多くの成果を上げ、また、米・中・

越の三つの角度からも示唆に富む研究成果が著されてきた。しかし、これらの先行研究には次のような三つの問題点があるように思われる。すなわち、(1) 中越関係の形成と変化に関する詳細な研究が少なく、特に 1960 年代末における中越関係の変質に関して分析した成果が存在しない。(2) 米中和解と中越関係という角度から三国間の連関に焦点を当てた研究が少ない。(3) ニクソン政権期の公文書などの新資料を使用した研究が少ない。

本論文は、次の四つの問題を仮説的に提示し、検証を試みた。(1) 中華人民共和国建国後の中越関係は、「同志プラス兄弟」関係、「事実上の同盟」関係として出発したが、米中和解以前の 60 年代末にすでに変質していたのではないか、(2) 対米和解に当たって、中国はむしろベトナムの立場を擁護し、アメリカに圧力をかけ、アメリカから譲歩を引き出したのではないか、(3) 対米交渉において、中国はベトナム問題を利用して台湾問題を解決しようとしたのではなく、むしろ逆に、ベトナム問題の解決を台湾問題の解決に優先させていたのではないか、(4) 当時の中国の指導者が彼らのイデオロギーや価値観から、米中交渉の過程でベトナムの立場を強力に擁護したのではないか、という四点である。

本論文は、アメリカ、中国、ベトナム、ロシアなど関係国から入手した資料（中英和文）に基づき実証的な分析を試みたものである。

[第一章：中越関係の形成]

この章では、中華人民共和国とベトナム民主共和国との間で形成されていった第一次インドシナ戦争期における中越関係をめぐって、中国によるベトナム全面援助政策がどのように展開し、１９５４年のジュネーブ会談前後に頂点に達した中越間の蜜月関係がどのような相貌を表したか、また 1963 年から 1964 年にかけて形成された中越共同作戦体制の実態分析などが行われている。その結果、この時期に中越両国が「同志プラス兄弟」的な関係を構成し、「事実上の同盟」関係にあったと位置づけられている。

[第二章：中越関係の変質]

この章では、1965 年から 69 年までの時期において、中ソ対立がエスカレートするなかでソ連の対ベトナム政策が変更され、その影響を受けて中越関係が次第に変質し、双方が相手に対する姿勢と対応を変えていく過程が時系列的な分析を通じて論じられる。ソ連の修正主義を批判する中国にとって、ソ越接近はベトナムに対する不信を募らせる要因にほかならず、加えて６８年のテト攻勢の軍事的成果をめぐる中越の認識の相違やテト攻勢後に始まった米越交渉に対する中国の猜疑心が中越間の軋みを増幅させ、1960 年代末に米中接触の兆しが見え始める頃には中越間の「兄弟」関係、ないし「事実上の同盟」関係はもはや消滅していたことが明らかにされる。

[第三章：米越交渉と米中和解への動き]

この章では、ジョンソン政権に代って登場したニクソン政権の対越政策と米中和解に向けた対中国政策の転換過程が、パリでの米越秘密交渉の展開と絡ませながら描き出される。1969 年から 71 年 7 月のキッシンジャー秘密訪中に至るまでのアメリカの対ベトナム政策

の展開と対中国政策の転換は、ニクソン＝キッシンジャー路線の集大成として記憶される。この間の息詰まる外交ドラマが、米越パリ秘密交渉や中ソ対立を睨んだ米中接近のリアリズムを織り交ぜながら描き出され、加えて、「事実上の同盟関係」が基本的に存在しなくなったにもかかわらず、中国のベトナムに対する援助の再強化がこうした背景要因を孕みながら、なぜ決定されたのかが論じられる。

［第四章：キッシンジャー秘密訪中とベトナム問題］

米中接近の時点で、現代中越関係における三つの性格のうち①伝統的関係としての「兄弟」関係と②近代的国家関係としての「事実上の同盟」関係が存在しなくなった一方で、③近代的イデオロギー関係としての「同志」的関係は、対ソ評価をめぐる中越間の食い違いが際立ったにもかかわらず、依然として存在していた。この章では、この「同志」的関係に対する中国の立場を検証するために、１９７１年７月のキッシンジャー秘密訪中を軸にしてベトナム問題がどのような展開をみせたかが考察される。キッシンジャー・周恩来会談などの第一次文献を分析した結果、台湾問題をベトナム問題にリンクさせたアメリカの戦略を受け、中国がベトナム問題の解決を台湾問題に優先させる方針を打ち立てたこと、中国はベトナムの立場をサポートし、米軍撤退と南ベトナム政権打倒の姿勢を堅持したこと、米中交渉でベトナム問題解決の進展を求めたこと、アメリカの協力要請に応じなかったことなどが明らかにされる。

［第五章：キッシンジャー１０月訪中とベトナム問題］

この章では、キッシンジャー秘密訪中後から 10 月の訪中までの中国内部での動き、周恩来による訪越と中越間の溝の拡大、パリにおける米越秘密交渉の展開とアメリカが進めてきた「ベトナム化」政策の中止の検討などを行う。その結果、キッシンジャー訪中が「ベトナム化」政策の中止など、アメリカの対越交渉姿勢の変化をもたらし、中国とベトナムに対する初めての政治的譲歩を画したこと、この間の中国のベトナム支持姿勢は中国指導部のイデオロギーと価値観が主要要因だったことが明らかにされる。

［第六章：ニクソン訪中とベトナム問題］

二回にわたるキッシンジャーの訪中で始まった米中接近は、１９７２年２月のニクソン訪中で完結し、アジアにおける冷戦の潮目が大きく変化していく。この章では、ニクソン訪中直前の米越関係と中越関係が素描されるとともに、ベトナム・インドシナ問題の早期解決とベトナム問題の解決を台湾問題の解決に優先させる中国の基本政策がニクソン訪中後も堅持されたことが論じられる。この章でとくに力点が置かれているのは、米中関係の「哲学」、すなわち米中関係における長期的、マクロ的、戦略的な関係についてニクソンと毛沢東が抱いていた認識の分析であり、この「哲学」も台湾問題とベトナム問題に収斂されることが示唆される。

［結　論］

本論文のモチーフは中越関係の変化を独立変数として設定し、米中接近を媒介変数として入れ込む手法を用いて中越関係の変化と変質がどのような軌跡を辿ったかに据えられる。

冒頭の研究課題を追究した結果として、以下のような結論が導き出される。

第一に、現代中越関係は伝統的な「兄弟」関係、近代的国家間関係としての「事実上の同盟」関係、近代的イデオロギー上の「同志」関係という三つの内容を持つ極めて密接な関係として形成された。しかし、1960年代半ば以降、その変化が始まり、1960年代末には変質し、「兄弟」関係、「事実上の同盟」関係ではなくなった。第二に、米中交渉の中で、中国はベトナムの立場をサポートし、米軍撤退とベトナム統一の原則を守り、時間的にベトナム問題の解決を台湾問題に優先させる方針を取った。アメリカは「ベトナム化」政策の中止や、政治的譲歩を示す提案を提示するなど、重大な譲歩を示した。第三に、中国がベトナム問題を利用して台湾問題を先に解決しようとした事実は見当たらず、米中交渉のなかで、中国はベトナム問題の解決を急ぎ、台湾問題では待つ姿勢に終始した。残る問題は、なぜ中国がベトナム問題の解決に拘ったか、であるが、その最も重要な要因は、当時の中国指導部のイデオロギーと価値観にあった。

2．論文の特徴と評価

本論文では、以下の四つの論点が仮説的に提示される。すなわち、（1）中華人民共和国建国後の中越関係は、「同志プラス兄弟」関係、「事実上の同盟」関係として出発したが、米中和解以前の60年代末にすでに変質していたのではないか、（2）対米和解に当たって、中国はむしろベトナムの立場を擁護し、アメリカに圧力をかけ、アメリカから譲歩を引き出したのではないか、（3）対米交渉において、中国はベトナム問題を利用して台湾問題を解決しようとしたのではなく、むしろ逆に、ベトナム問題の解決を台湾問題の解決に優先させていたのではないか、（4）当時の中国の指導者が彼らのイデオロギー・価値観から、米中和解・米中交渉の中で、ベトナムの立場を強力に擁護したのではないか、という四点である。

第一次インドシナ戦争における中越関係において、建国後の中華人民共和国政府がベトナム民主共和国（以下、ベトナムと略記）に物心両面にわたり全面的な支援を提供し、フランスの敗北を決定づけるほど重要な役割を演じてきたことはつとに知られている。第一次インドシナ戦争終結後も北緯１７度線を挟んで南ベトナムと対立し、フランスに代わってインドシナに介入を強めていくアメリカと対立したベトナムに、中国が全面的な支援を提供したことも周知の歴史的事実である。

論者はこうした中越間の蜜月関係を「同志プラス兄弟」関係ないし「事実上の同盟」関係と仮説的に位置づける。この仮説設定は、第二次世界大戦集結後にアジアで戦われた最も苛烈な民族解放闘争である第一次インドシナ戦争に、民族解放の理念を共有し中国革命を成功に導いた中国がベトナムを全面支援する形で関ったという事実からも充分説得力をもつものとして首肯できる。こうした民族解放理念と革命理念を共有し合う両国が、長期にわたるベトナム戦争の渦中でやがて関係を冷却させていったのはなぜか。グローバル冷戦のなかで東西陣営内部の亀裂が進行していった過程は、とくに共産陣営内部における中

ソ対立の顕在化はイデオロギー対立の深化の過程として特徴づけられる。本論文のなかでも、「同志プラス兄弟」ないし「事実上の同盟」関係としての中越関係が60年代末に後景に退いたことと中ソ対立の深化との関連性について言及されており、共産圏における二極対立がベトナム戦争における中越関係の変質に影響を及ぼしたことの歴史的意義が第一次文献の分析を通じて検証されたことの意義は大きい。

さらに60年代における米中和解への水面下の動きと並行して演じられた米越交渉が、アジア冷戦とグローバル冷戦の交差点における中国外交の変質をもたらす要因となったことは周知の事実であり、本論文で分析されているキッシンジャーの秘密訪中とそれに続く７２年2月のニクソン訪中時における米中首脳会談の言説の応酬は、この点を余すことなく示している。まさにキッシンジャーとニクソンの訪中はアジア冷戦の決定的転機を画す一大歴史的イベントであり、ベトナム戦争の性格をも変えかねない意義を残した。

米中和解を媒介変数として入れ込んだ本論文が、ベトナム戦争をめぐる中越関係の展開を縦軸にとり、米中接近を横軸にとってアジア冷戦の一局面をストーリーとして完成させたことは、これまで発掘されてこなかった多くの第一次文献を丹念に渉猟した地道な努力とあいまって、その高度な独創性を示しており、最も高く評価すべき点である。とりわけ米越関係の変化を示す証拠ともいうべき１９６３年3月１９日の中国共産党中央文書（湖南省文書館資料)(第一章)やソ連の対ベトナム政策の変化を裏づけるソ連側文書(第二章)、１９６８年に行われた米越間の公式秘密会談の記録（第三章）といった貴重な第一次資料を発掘し、論証資料としてわが国で初めて利用した意義は大きい。しかも、中越関係、米越関係、中ソ関係の二国間関係に留まらず、ベトナム戦争期のアジアにおける冷戦構造・オ・を理解するうえで、最も重要な四つのアクター間の複合的相互作用にまで考察の射程を及ぼしたことの意義も認めなければならない。

さらに、本論文のオリジナリティの高さを示すものとして、アメリカ、中国、ロシア、ベトナム及び日本の資料を使用し、いわばマルチ・アーカイバル・アプローチを行い、徹底した第一次資料の発掘と分析を行った点をあげなければならない。これまで、冷戦後に公開された第一次資料を用いた先行研究の中で、重大な論点が見落とされたと思われる例として、旧ソ連とベトナムの第一次資料が挙げられる。たとえば、1960年代半ばまで事実上存在した「中ソ分業体制」を裏付ける資料や、中ソ越関係の重大な変化、さらに1970年頃からベトナムが再びインドシナ連邦の建国を提起したこと、及びソ連の戦略的意図を示すソ連外交官の報告、「テト攻勢」をめぐる中越間のコミュニケーション・ギャップとそれに起因する中越間の対立、中国の対越姿勢の変化を示す資料などがそうである。

同時に筆者は、独自に中国側の新資料を入手し、また中国人当事者・関係者にインタビューを行い中国のベトナムに対する姿勢の変化がなぜ起きたのかを問うている。たとえば、1960年代前半の中越間の摩擦を示す1963年の中共中央文件、中国人青年による自発的なベトナム支援違法越境問題に対する中国政府の懸命な対応を示す公文書、中国共産党対外聯絡部の米中関係改善に関する説明の内部文書、「トンキン湾事件」後中国国内の民衆の動

揺や政府批判を示す内部極秘文書、中国のベトナム支援がアメリカの核攻撃を招く可能性を想定した劉少奇の湖南省での極秘講話、湖南省のベトナム援助関連資料などを発掘し、中国側の態度変化がどのような理由でもたらされたかを丹念に分析する。このような新しい一級の第一次資料を用いた研究は、本論文のオリジナリティの高さを際立たせる。

全体的にみると、先行研究には、1960年代末における中越関係の変質についての詳細な研究がなく、またニクソン政権期のアメリカ公文書を含む第一次資料を使用して米中越三国間関係の角度から米中交渉と米越秘密交渉について総合的に分析した研究も見られない。この点に大胆に踏み込んで当該分野のパズルを解こうとした本論文の野心的な試みは、アジア冷戦史における中越関係のもつ意義を浮き彫りにした点で成功を収めたと評価できよう。

しかし、本論文は独創性の高い論文として評価できるものの、いくつかの点で問題なしとしない。最初に指摘しなければならないのは、「同盟」などの概念の定義にかかわる問題である。1950年代に「兄弟プラス同志」関係ないし「事実上の同盟」関係にあった中越両国は、なぜ同盟条約を結ばなかったのか。「兄弟プラス同志」関係ないし「事実上の同盟」関係を象徴する制度的な枠組みは存在したのか。もしも存在しなかったのなら、中越関係を「兄弟プラス同志」関係ないし「事実上の同盟」関係と位置づける根拠は何か。国際政治の世界で「事実上の同盟」という概念が用いられることはない。単なるレトリックとして用いるならまだしも、条約に基づかない緊密な政治的・軍事的・経済的関係を「事実上の(de facto)同盟」関係という表現を使うなら、その意味するところを学問的に定義づける作業が欠かせない。

また、米中和解の展開のなかで中国がベトナム支持の姿勢を変えなかった理由として、中国のイデオロギーと価値観が強調されるが、イデオロギーとはいったいどのような内容と性格をもっていたのか、が説明されていない。果たして共産主義イデオロギーなのか、それともナショナリズムなのか。あるいは両者が綜合されたものなのか。毛沢東路線の本質は民族解放主義であり、ソ連との外交上・安全保障上の利益対立と重なり合って出された政策ではなかったか。

さらに、結論において「台湾よりベトナムを優先」、「台湾を犠牲にした」と述べているが、どのような論拠に基づき、どのような資料によって裏づけられるかが示されていない。中国の意図は台湾問題とベトナム問題の“切り離し(de-linkage)”だったのか、それとも台湾問題の後回しなのか。第一次文献のさらなる読み込みと検証を重ね、また関係者へのインタビュー調査を行うなど、結論の補強作業を行うことが望まれる。また、１９６５年にソ連の対ベトナム政策が変更されたとするなら、ソ連政府・共産党の公式文書に基づく検証が不可欠であり、政策の変更過程を含めロシア文書館の公開文書を精査する必要がある。

また、本論文が焦点を当てているキッシンジャー・周恩来会談を無批判に取り上げてい

るのも問題である。この会談に対する批判的文献はすでに多く著されており、これらの批判的文献を丹念に読み込んだうえで、キッシンジャー・周恩来会談のもつ国際政治的、歴史的意義について中越関係の変質と関連づけながら再検証することが欠かせない作業となろう。

しかし、以上のような問題点にもかかわらず、本論文が当該論題で世に問われたことの意義は、ベトナム戦争史はもとよりアジア冷戦史研究の深まりを象徴するものとして高く評価されるべきである。したがって、本論文は博士（政治学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以上。

２００９年１０月

主査・山本武彦（早稲田大学教授）
副査・朱建栄（東洋学園大学教授）
同・田中孝彦（早稲田大学教授）
同・毛里和子（早稲田大学教授）